

2020. 3. 7 (日) マタイ24:1~2

24:1 イエスが宮を出て行かれると、弟子たちが近寄って来て、イエスに向かって宮の建物を指し示した。

24:2 すると、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはこれらの物すべてを見ているのですか。まことに、あなたがたに言います。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」

<説教>

イエスによる神からの度重なる呼びかけにも関わらず、律法学者やパリサイ人たちを代表とするイスラエルの民はイエスをキリストと認めず、信じませんでした。

反対に律法学者やパリサイ人たちはイエスを憎み、ねたみ、ついには殺そうと決めました。

時は過越の祭りの週でした。

エルサレムには非常に大勢の人々が集まり、その神殿ではいつにも増して多くの動物のいけにえが捧げられ、多くの献金が捧げられていました。

しかしその多くは、殊に律法学者やパリサイ人たちのそれらいけにえや献金は人に見せるための、自分を誇るための空しい偽善でした。

あの、レプタ銅貨二枚を献金した一人の貧しいやもめなどは例外の少数者だったに違いありません (マルコ 12:41-44. ルカ 21:1-4)。

エルサレムの神殿は多くの偽善が演じられる劇場に成り下がっていたと言えるでしょう。

そんなイスラエルの民に、「見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」(23:38)、こうイエスは宣告ないました。

そしてイエスは〈宮を出て行かれ〉(24:1)ました。

〈弟子たち〉もそんなイエスの後をついて宮を出て行きました。

その弟子たちがイエスに〈近寄って来て、イエスに向かって宮の建物を指し示し〉ました。

マルコの福音書には〈イエスが宮から出て行かれるとき、弟子の一人がイエスに言った。「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。」〉(マルコ 13:1)と書かれています。

また、ルカの福音書には〈さて、宮が美しい石や奉納物で飾られている、と何人かが話していた…〉(ルカ 21:5)とあります。

このエルサレム神殿は「ヘロデの神殿」と言われたもので、ヘロデ大王が莫大な金を投じ、長い年月をかけて修築し作ったものでした。

「この神殿は建てるのに四十六年かかった。」とユダヤ人はイエスに言いました (ヨハネ 2:20)。

「その規模の壮大なことは他に類を見なかった」とあるユダヤ人歴史家は言いました。

「ヘロデの神殿を見ずして結構と言うな。それは…青、赤、緑の色とりどりの大理石でできている。…石は大洋の波のように見える…」とあるユダヤ教文書には書かれているそ

うです。

「その壁の石は決して破壊されないように、互いに層をなして積み重ねられていた」とある注解者は書いています。

これらから〈イエスに向かって宮の建物を指し示し〉た〈弟子たち〉の気持ちが推測できます。

「見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。」(23:38)とイエスは言われ、神殿に背を向けて出て行かれました。

そんなイエスの後について神殿を出た弟子たちは振り返って神殿を見たのではないでしょう。

そして、そうは言ってもやっぱりエルサレム神殿はすばらしいということになったのでしょう。

そして、イエスさま、もう一度、改めてこの神殿を見てください、と言ったのです。

「イエスのあわれみの招きを頑なに拒んだイスラエルの民がその不信仰の故に神のさばきを受けるのは仕方がない。でもそれは余りにも悲しい。イエスさま、そこまで言うか。ならば何か慰めがほしい。そうだ神殿がある。莫大な金と年月と労力をかけて建てられた神殿だ。その建物は、石は、奉納物は美しい。これこそ我らユダヤ人の誇りだ。イエスさまはああ言うけど、やっぱこれは壊れずいつまでも残るはずだ。」という感じです。

そこには、あれほどまでに同族ユダヤ人を責め、民族の誇りを否定するようなことを言うイエスに対する多少の反感のようなものもあったのではないかと思います。

「われわれの父はアブラハムだ」(3:9)みたいな民族的プライドが弟子たちにもまだどうしてもどこかにあったのではないか。

直接自分のことを言われたわけではないのに、同胞の罪が指摘されると自分のことを言われたような気持ちになってしまう（と言うことは実は同じ罪を自分も持っていることの裏返しだともいえるでしょう）。

神（と人）の前に徹底的に罪を認めて砕かれることをよしとしないで「でも少しは良いところもある、こんなに頑張っているんだ」と言いたい思い。

そんな自分や自分の手のわざに対する誇り、そしてある種の感動。

そしてそれらを神に向かって示し、神に同意を求め、自分と一緒に感動することを求める。

そんな私たち人間の暗い情動が見え隠れする気がします。

ここで弟子たちがイエスに向かって人間の手のわざである宮の建物を指し示してその立派さ、美しさ、すばらしさを誇って見せ、しかもイエスに同意を求めたことを単に素朴と言えば素朴、幼稚と言えば幼稚な誰にでもあることだと簡単に見過ごすわけにはいきません。

イエスはすでにご自分を「宮よりも大いなるもの」(12:6)として明らかにお示しになっていました。

またご自分のからだを神殿として示しておられました（ヨハネ 2:21）。

ですから弟子たちはここでイエスに対して、自分たち人間と人間の建てた神殿の方がイエスよりも偉大で、立派で、すばらしいものであると傲慢にも誇ったのでした。

どんなに見た目は大きく立派で美しい神殿や礼拝堂でも、真の神殿であるイエスがそこ

を出て行かれ、イエスがその中におられないなら、もうその神殿や礼拝堂はむなしなものであり、そこでの礼拝もむなしなものです。

私たちも礼拝のたびごとに主イエス・キリストが聖霊によって礼拝のただ中にご臨在くださるようへりくだって祈り求めなければなりません。

さてイエスは弟子たちに「あなたがたはこれらの物すべてを見ているのですか。まことに、あなたがたに言います。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。」と宣告なさいました。

こうしてイエスはこの約 40 年後にこのユダヤ人が立派だ、美しい、破壊されることなど絶対ないと誇っていたエルサレム神殿がローマ軍によって破壊されることを予告なさいました。

そして本質的には、毎日、毎年、何度も動物の犠牲を捧げる神殿礼拝とその場である神殿が、ご自分の十字架の死の故に、無用になることを宣告なさいました。

ヘブル人への手紙ではそのことが繰り返し言われています。

〈イエスは、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のために、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。イエスは自分自身を献げ、ただ一度でそのことを成し遂げられたからです。〉(ヘブル 7:27)

〈しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっと完全な幕屋を通り、また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。〉(ヘブル 9:11,12)

〈…イエス・キリストのからだは、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています。〉(ヘブル 10:10)

私たちはこの、十字架で死なれたが、三日でよみがえられた真の神殿(ヨハネ 2:19-21) 真の神殿イエス・キリストにうちにあつて神を礼拝するのです。